

森鷗外の武士道観

『意地』を中心にして

一、序

独自性を保持しながら近代化に成功した日本を模範にしようとする発展途上国が多くなつた。マレーシアのマハティル首相のルクイースト政策を初め、私の国インドネシアもその一つである。正直に言つて、この国々にとっては最も魅力があると感ぜられたのはおそらく日本の優れた技術であろう。だが、私の考えでは、日本の成功の秘密はただ物を生産するための「技術」にあるのみでなく、その技術をあやつる「日本人」そのものである。従つて、日本人の考え方の底に流れる根本的な精神を探り、それを理解せねばならない。

そういう考え方に基づいて私は明治時代の一人の人物、森鷗外に焦点を絞ることにした。なぜ鷗外を選んだかについてはいろいろな理由があるが、最も大きな理由は、彼は西洋の学問につい

ての知識人であるにもかかわらず、日本的なものを重視する、つまり独自性を守ろうと努力した人物であり、また、為政者側に居ながら、為政者を正すような批判的な作品を書いたりして、文学の面での活躍も目覚ましいからである。

ジョンニ・ラスマダ・H

更に、なぜ今回『意地』という作品を取り上げるかについても述べておく必要がある。鷗外が小説を書いたのは、官僚として受けたストレスの解消、自分のバランスを保つための一種の遊びの態度で始まつたと言われるが、明治天皇、乃木大将の死によつて、遊びの精神からもっと積極的なものへ考えが変化していったと思われる。彼は、乱心から起こつた行為だと批判された乃木の殉死を擁護するために、武士社会を舞台にした小説『興津弥五右衛門の遺書』（略して『遺書』とする）を書いた。これが彼の歴史小説の第一作である。それから彼は次々と歴史小説を手がけた。一連の歴史小説には鷗外個人の独特な考

え方が織り込まれている。更に大きく言えば、そこには日本人の精神、日本人の在り方が示されている。特に『遺書』、『阿部一族』、『佐橋甚五郎』の中に登場する三人の主人公、すなわち興津弥五右衛門・阿部弥一右衛門・佐橋甚五郎とその周辺に居るさまざまな人物の生き方に注目するとそれがはっきりと現われている。

これらの作品は『意地』に収録されたものであるが、いずれも武士社会を舞台にした作品である。初稿『遺書』は前にも述べたように乃木大将の殉死を擁護するために書いたと言われるが、『意地』に収録された『遺書』は『阿部一族』を書いてから改稿された作品であり、『阿部一族』と『佐橋甚五郎』に続き、相互に関連のある三部作となっている。この作品には彼の他の歴史小説に見られるテーマ、つまり主従関係の強い武士社会の中の個人の問題(体面、名譽、意志、行爲と判断など)が見られる。すなわち『意地』は鷗外の歴史小説を代表する作品であり、そこに描かれた武士の在り方を解明することが本稿の目的である。

二、歴史小説を書いた背景

鷗外を考える場合、彼の生きた時代を遡って見てゆく必要があろう。明治時代は西洋文明の流れ込んで来た時代であり、人々は日本古来の武士道の精神に代わって、西洋文明の精神を取り入れようと躍起になり、混沌たる様相をしていた。その中に

生きた鷗外の精神はどのように動いていたのだろうか。

彼は武士階層出身である。そしてドイツ留学の経験をもっている。即ち、西洋文明の体験者である。いわゆる明治社会のその混沌を、まさしく個人で表わした人物である。また、軍医という当時のエリート官僚、つまり「お国柄」の「柁を取る」側に居ながら、文学作品を通じてそのお国柄の柁の取り方の場合によっては批判したり擁護したりする。彼はその動いている時代に生きて、どのように自分の精神を形作っていたか、興味のある問題といえよう。この点を究明するには、鷗外の生き方に大きな影響を及ぼした下記の四つの事件を見さだめておく必要がある。

(1) 小倉左遷(一八九九〜一九〇二)

鷗外が小倉に左遷されたのは文学に手を出しすぎて、本職の軍医の仕事をおろそかにしたためだと言われる。東京から離れている所にいけば変わるだろうという上官、特に石黒並びに小池の対策であった。だが実際はその背後には官僚の醜い争いがあったと言われる。鷗外は、自分が裏切られたと悟ったので、軍医を辞退しようかと思っただが、親友の賀古鶴所などの説得で仕方なく小倉へ向かった。

要するに、小倉左遷は石黒並びに小池と鷗外との間の不和な主従関係から生じた事件であり、官僚の中の個人としての鷗外に辛い経験を味わせた。

(2) 日露戦争(一九〇四〜一九〇五)

日露戦争は、しばしば指摘されるように、日本にとって(ア

アジアにとってと言いたいが）エポック・メイキングな出来事だった。日本が西洋文明の一翼をになうロシアに勝ったと言うことは、日本人に日本人としての自覚を大いに深めさせた。鷗外もその一人である。いや、一般の日本人以上であつたらう。唐木順三によると、鷗外の死に対する考えは日露戦争従軍中に廻ると考えられる。唐木は次のように言う。

鷗外は日露戦争に従軍中、身近に多くの死を見た。死を決し、死を恐れずに敵に向って進み続ける多くの勇士を見た。幾千幾万の部下を死地につきすませた將軍を見た。そして日本を支えているもの、日本の強い理由を身をもって知つた。（中略）凱旋かいせん以来、鷗外の武士道研究は一段と進められたのではないかと思われる。日本人の死を恐れないのは何処から来るか。命をも惜まない精神の鍛錬は如何にして出来、また残されたか。

日露戦争に従軍出来たことは、鷗外にとって一つの運命であると言つても過言ではなからう。日露戦争従軍の経験により、彼の武士道研究は一層内容深いものになった。日本人の強い精神は、武士道から由来すると考えたのである。西洋、即ちロシアに勝つたことは西洋を知っている鷗外にとってさらに日本を特殊な意味あるものと感じさせたに違いない。これを機縁として、彼は日本的なものに惹かれていつた。

(3) 大逆事件（一九一〇）

大逆事件が起つた時、『沈黙の塔』と題した短篇小説を著わして、鷗外は社会的・政治的な新思想を彈圧する政府の権力

者を鋭く批判した。他方、『食堂』では作中人物である山田と木村の会話の中に、「あんな連中がこれから殖えるだらうか。」という山田の質問に対して、「先づお国柄だから、當局が巧に柁を取つて行けば、殖えずに済むだらう。」というように木村に答えさせている。

なぜ鷗外が大逆事件当時者に対し、同情の姿勢からこのような態度の変化を見せたのだろうか。まず言えることは、『沈黙の塔』は純粹の文学者としての姿勢から生まれた作品であるのに対し、『食堂』は鷗外の官僚としての態度がうかがわれる作品である。後者においては、大逆事件を中心に、反国家思想のような考え方が知識階級に広まることによつて、日本の伝統や秩序が脅かされることを、国家を常に意識している鷗外は案じたのであらう。「當局が巧に柁を取つて行けば」と言つたように、彼は政府の政策を期待していた。そして期待する態度が更に積極的になり、秀麿を主人公とする『かのよう』を書いた。秀麿は歴史家であり、ドイツの留学から帰国後、自分の仕事と定めた日本の歴史を書くためには、歴史と神話をはっきり区別しなければならぬと考えた。しかしそれを明らかにすれば周囲の事情が許しそうにない。ついに彼は、神話に対する信仰を温存しつつ、それと並行して科学的基礎に立つて歴史の研究が出来るようにと、ファイヒンガーのかのように哲学を利用するようになった。

主人公の秀麿はイコール鷗外であると言つてよいであらう。ここには合理的な思想の上に成り立つ近代的名ものと非合理的

な伝統的なもの、あるいは西洋的なものと東洋的なものに悩まされた鷗外の、必死に戦った末の態度がうかがわれる。だが、小説の終わりに、画家である友人に、秀麿のかのように哲学を「八方塞がりになったら、突貫して行く積もりで、なぜ遣らない」と、きびしい批判させている。この画家の発言は鷗外が考えた最後の可能性であり、当時としては実行するのはまだ不可能な行為であった。またこの画家の発言が示すように、「かのように」哲学は彼にとってまだ満足感を与える思想ではなく、単なる一時的な対策であるにすぎなかった。なぜならば、それは当時重大な問題となった大逆事件や南北朝正閏論に悩まされた山県有朋を支持するために書かれたと言われる。また、山県有朋の要望があることを認めたものの、国家を常に意識する鷗外の責任から生まれたのだという磯貝英夫の見方もある。

確かに『かのように』は鷗外の苦しい立場を物語った作品である。ただ、現実の彼にとってはそれはまさに一時の慰みであった。その姿勢は、明治天皇の崩御に続く乃木大将の殉死に直面した時、また変化していったのである。

(4) 乃木大将の殉死（一九二二）

乃木大将の殉死は『かのように』のような便宜主義的な思想を持ち出す鷗外に痛烈な衝撃を与えた。これに刺激されて、彼はもがきながら何かを求めた。日本を支え、自己を支えたものは何であるか改めて考えたのである。日露戦争の際に二人の子が戦死した知らせを聞いても表情を変えない乃木大将の姿を思い出した。これは絶対の權威を信奉する人でなければ出来ない

ことである。陛下が命ずるならば、自己の生命は無論のこと、いかなる犠牲も払う信念を持っている「武士」の態度である。そして最後には、明治天皇に対する忠誠を表わすために、自分の死を以て示したのであった。その強烈な力が鷗外に、日露戦争に従軍して体得したものの、西洋的なものへの対決における支柱となったもの、つまり、日本を象徴する權威の觀念を蘇らせ、その權威の前に生命に惜まない日本伝来の思想を再び明瞭な形で現われるようにさせたのであろう。鷗外はこういう瞬間的なはずみがあったために、「Resignation」や「かのように」などのような抛り所のしっかりしない思想を捨てたことになり、武士道の強い力を感じて、そこに安らぎを見出したものと思われる。そして乃木大将の殉死を肯定するために歴史小説『遺書』を書いたのである。

以上の四つの事件はそれぞれに質を異にしているのだが、いずれも鷗外の精神に深刻な影響を及ぼした。それらに直面して、鷗外は官僚と文人という二つの立場で存在していたため、複雑な反応を示したのである。

三、『意地』に描かれた武士

(1) 『興津弥五右衛門の遺書』

この作品の内容を論ずる前に、あらかじめ述べておかねばならないが、『意地』に収録された『興津弥五右衛門の遺書』はのちに改訂されたものであり、大正元年（一九一二）『中央公

論』に発表された初稿とは異なっているところがある。例えば、初稿では、長崎へ一緒に行き、後に興津によって殺されてしまった侍の名前は明確にされず、ただ「同僚」とのみ記されているだけだが、改稿には「横田清兵衛」とはっきり姓名が書かれた。年齢や、起こった事件の年などにも異なるところはあつた。ここでは省略する。もっとも大きな違いは、次の点である。初稿には、興津は忠興の十三回忌を選んで、遅ればせながら追腹をしたと言ひ、主君の許可がないさびしい殉死として描かれている。ところが改稿では興津の殉死は許可のある晴々した殉死とされている。なぜそうなつたかについては色々な説があるが、初稿は乃木大将の殉死を弁護するために急いで書かれたため、資料にある史実を見のがしたところがあるという見方がある。

また、改稿は『阿部一族』を著してから書きなおされたもので、『阿部一族』を書いた時に発見された「殉死の掟」が適用されたという見解もある。初稿が乃木自刃と深いかかりあいをもっていることはすでに多くの論文がそれを明確にし、すでに常識となつていたので、ここでは触れない。以下『意地』に収録された改稿に描かれた武士道の在り方について検討してゆくことにしたい。

まず「名譽」を重んずることについて関係のあるところが、末木ではなく、どうしても本木を買わなければ気が済まない興津の態度に見られる。仙台の伊達家に本木を取られたら面目が立たなくなるからである。ここでは興津個人の面目というよりも、主君忠興の面目を指している。また、長崎へ一緒に行った

同僚横田清兵衛を殺したのも「名譽」、つまり興津個人の名譽を守るための行為である。ここでいう「名譽」は立派な事を爲し遂げた時に受ける「名譽」の概念と違い、自分の名に対する評価、平たく言えば「プライド」と言ったような意味を示す。

主従関係を重視する場面としては、「只主命と申物が大切なるにて、主君あゝの城を落せと被仰候はば、鉄壁なりとも乗取り可申、あゝの首を取れと被仰候はば、鬼神なりとも討果たし可申と同じく、珍しき品を求め参れと被仰候へば、此上なき名物を求めん所存なり、主命たる以上は、人倫の道に悖り候事は格別の言葉がある。これは『葉隠』的武士道と全く同じ考え方に立っていると言えよう。

興津の殉死については次のように描かれている。横田をやむを得ず殺してから、彼は伽羅の本木を買ひ取り、忠興に持参した後、「主命大切と心得候為めとは申ながら、御役に立つべき侍一人討ち果たし候段、恐れ入り候へば、切腹被仰付度」と、切腹を願ひ出た。しかし忠興は彼のいい分をもつともと認め、切腹する必要がないことを告げる。それどころか、忠興と忠利より特別の引き立てを受け、多くの重要な仕事を任せたりしたところが、病気のため、忠利が歿し（一六四一）、また忠興も（一六四五）相次いで歿する。忠利が歿した時、十九人が殉死した。これら殉死者を見聞きするにつけ、興津は大変羨やましう思うが、江戸詰の仕事はまだ片付けていないので、ただ空しく月日の立つのを待つ。そして仕事を全部片付けることが出来

た正保四年（一六四七）に光尚に許可を得て、晴々と切腹した。ここには、主君と家臣の間に温和な主従関係が結ばれていることが明確に描かれている。

その他、仇討を防ぐために、忠興は興津と横田の嫡男を互いに恨まないことを誓い合わせたことが忘れずに書かれている。

このことは、鷗外が武士道の性質に気を配りながらこの小説を書いた証拠であろう。だが横田家は遂に筑前国（現在の福岡県の北西部）に引越してしまった。この横田家の行為は「体面」に深い関係があるように思う。

(2) 『阿部一族』

この小説は寛永十八年（一六四一）肥後熊本藩主細川忠利が歿した際に起こった殉死事件を素材にしたものである。主君に許された十八人の栄光ある殉死と、主君に許されないのに意地を張る阿部弥一右衛門の殉死——そのために一家が減びること——が小説の骨組であるが、そこにはいくつかのテーマが織り込まれている。それらを検討しながら、「献身」という「我」の否定と、「名」や「体面」という「私」の追求の問題を考えてみたい。

まず殉死の掟というものがはっきりと描かれている。鷗外は殉死者の一人である長十郎の逸話のところで次のように書いた。「殉死はいつどうして極まったともなく、自然に掟が出来てゐる。どれ程殿様が大切に思へばと云って、誰でも勝手に殉死が出来たものでは無い。（中略）その許もないのに死んで、それは犬死である。武士は名聞が大切に犬死はしない。」こ

こでは殉死の第一条件として、主君の許可が絶対に必要であること、つまり「掟」として明示しているのである。

次に殉死の動機を分析してみよう。この問題については長十郎の心境を考察しているところによく示されている。それを分析すると、「報謝と賠償の念との道は殉死の外無い」とあるのは「自律殉死」になる。報謝と賠償とは、忠利と長十郎の間にある調和的な主従関係のことを指している。他方、「人が自分を殉死する筈のものと思つてゐるに違ひないから」というところは「他律殉死」に相当する。また、「此時長十郎の心頭には老母と妻との事が浮んだ。そして殉死者の遺族が主家の優待を受けると云ふことを考えて、そこで己は家族を安穩な地位に置いて、安じて死ぬることが出来ると思った。それと同時に長十郎の顔は晴々した気色になった。」という描写があり、これは殉死する前の長十郎の心のなかの「功律殉死」である。以上を見ると、長十郎の殉死の背後には三つのモチーフが含まれていることがわかる。

もう一人の殉死者津崎五助の場合を見ると、「己は下司ではあるが、御扶持を戴いてつないだ命はお歴々と変わったことはない。殿様に可哀がって戴いた有難さも同じ事ぢや。」という心境は「自律殉死」に相当する。また、「御恩になつてゐなされた歴々は皆けふ腹を切ってお供なさる」とか、あるいは彼の妻の言葉「お前も男ぢや、お歴々の衆に負けぬ様におしなされい」は「他律殉死」に属する。

このようにして、武士の理想とされた忠誠の究極的な表現で

あるはずの殉死を、鷗外は三種類のモチーフに分けてしまった。殉死を肯定する考え方から批判的な考え方に移りゆくのである。初稿『遺書』を書いた時、彼はかなり主観的な見方をしていたのに対して、『阿部一族』を書いた時はすでに乃木自刃で受けた興奮がさめて、より客観的な態度が取れるようになったのであろう。

さらに殉死の許可をめぐる忠利の心理を見ておきたい。忠利の心理は次の描写によく現われている。やや長いが引用しておこう。

殉死の願いをして許されたものが、長十郎を加へて十八人あった。いづれも忠利の深く信頼してゐた侍共である。だから忠利の心では、此人々を子息光尚の保護のために残して置きたいことは山々であつた。(中略)自分の親しく使つてゐた彼等が、命を惜まぬものであるとは、忠利は信じてゐる。随つて殉死を苦痛とせぬことも知つてゐる。これに反して若し自分が殉死を許さずに置いて、彼等が生きながらへてゐたら、どうであらうか。家中一同は彼等を死ぬべき時に死なぬものとし、恩知らずとして卑怯者として共に歯せぬであらう。それ丈ならば、彼等も或は忍んで命を光尚に捧げる時の来るのを待つかも知れない。併しその恩知らず、その卑怯者をそれと知らずに、先代の主人が使つてゐたのだと云ふものがあつたら、それは彼等の忍び得ぬ事であらう。彼等はどんなに口惜しい思をするであらう。かう思つて見ると、忠利は「許す」と云はずにはゐられな

い。

ここに描かれているのは、殉死を願う臣下をどうすべきか、許可するか否かの忠利の心理である。尾形仿はこれについて、「ちようど内藤の場合の論腹を裏返しにしたものだといつていい」と言う。更に、「これは鷗外が、臣下の立場から考えてみても、主君の立場から見ても、殉死という美しい行為を支配する最も大きな要因が、封建武士社会に内在した「体面」というむなしの觀念にあつたと考えざるを得なかつたことを示している」という独自の見解を示した。ここで尾形は、殉死を「美しい行為」と言いながら、他方ではなにゆえに「体面」をむなしの觀念と言つているのが、私には理解し難い。なぜならば、「体面」とは「我」がいかに評価されるかという「名譽」につながる。更に追求すれば「名譽」は「名」に関連する。「名」は言うまでもなく、人間の不死なものであり、それを支える「体面」はむなしのものにはならないと思う。

さて、忠利は長十郎他十七人の殉死を許した。ところが、阿部弥一右衛門の場合に対しては、いくら願つても忠利に許可されなかつた。弥一右衛門は周囲から殉死にふさわしい立場と見られ、また自分もそのつもりであつた。なぜ忠利に許可されなかつたのだろうか。鷗外はその理由を、「一体忠利は弥一右衛門の言ふ事を聴かぬ癖が附いてゐる」、「忠利は此男の顔を見ると、反対したくなる」、「人には誰が上にも好きな人、厭な人と云ふものがある。そしてなぜ好きだか、厭だかと穿鑿して見ると、どうかすると捕捉する程の抛りどころが無い。忠利が弥一右衛

門を好かぬのもそんなわけである。」というように、性格不和として描いている。この理由は論理的な見方からすれば理解しにくいものであるが、実際には起こり得る現象であろう。

殉死の許可が得られなかった阿部弥一右衛門は家中の者に顔を会わせることが出来なくなる屈辱を想像する時、犬死と知って切腹するか、浪人になって熊本を去るかの二者択一を迫られた。しかし「己は己だ。好いわ。武士は妾とは違ふ。主の氣に入らぬからと云って立場が無くなる筈は無い。」と言って生き残ろうとした。ここでは、全体から離れて自我を主張する一個の武士の意地を鷗外は強調する。だが、個人は世間体に屈服することが多い。これは自然の掟のようであり、根性のある弥一右衛門も例外ではなさそうである。特に、「阿部はお許の無いのを幸に生きていると見える。お許は無うても追腹は切れぬ筈が無い。阿部の腹は皮は人とは違ふと見える。」という悪口が耳に入った時、阿部は世間が思った事と異なると、自分は死を恐れる臆病者ではないことを示すために切腹したのである。

もう一つ己の存在を主張する場面は、弥一右衛門の嫡男権兵衛の取った行為であった。阿部家の跡目は、許可のある殉死者の遺族のそれと違って、四人の兄弟に分配された。それによって本家は格が下ることになるので、権兵衛は不満を抱いて、先君の一周忌に焼香をした時鬻を脇差の小柄で切っしまい、忠利の位牌の前に供えたのである。彼はなぜそんなことをしたのか聞かれた時に、「某は不尚にして父同様の御奉公が成り難いのを、上にも御承知と見えて、知行を割いて弟共^{おつぱら}に御遺^{おつかひ}なされ

た。某は故殿様にも御当主にも亡き父にも一族の者共にも傍輩^{ほうばい}にも面目が無い。(中略) いっその事武士を棄てようと決心したした。」と答えた。だが、結局彼は縛り首にされてしまったのである。なぜ切腹という武士らしい死に方を与えなかったのだろうか。鷗外は作品の中で、光尚はまだ二十四才の若さだから「情を抑へ欲を制することが足りない。恩を以て怨に報いる寛大の心持に乏しい。」という解釈を付加するだけである。つまり、光尚はまだ若いから仕方がないと言う見方をしている。が、権兵衛に同情する姿勢が読み取れる。鷗外はこの場面を通じて、家来の運命を左右する主君の取る政策に問題があることを指摘したのであった。

この小説の締めくくりには、「情は情、義は義」という柄本又七郎のとった態度が描かれ、義を重んずる武士のモラルの例がとりあげられた。この点について尾形仿は「又七郎の武勇を元龜・天正生き残りの古武士の典型として賛しているかのごとくに見える。そのような又七郎の像をクロズ・アップして全編を結んでいることによって、この一作は全体として勇壯な肥後武士の群像を描き上げたもの、ないしは近世的武士像に対する戦国的武人像の優位を謳歌したものである。しかし『阿部一族』をそうした単なる武烈談と受けとり、鷗外をば日本武士道の擁護者をもって遇することは、鷗外の設けた巧みな陥穽^{かんせい}におちい^{おちい}る」という警告を発している。

しかしながら、私は尾形と違う見方をとる。たとえ鷗外が武士の擁護者とは言えないとしても、少なくとも彼は武士の理解

者であつた。鷗外が武士道に精神的な拠り所を求めたことはすでに述べた通りである。また、このことは彼の実生活を通して十分に納得の出来る理由を見出すことが出来る。彼の父は典医であるが、武士階級に属する。彼は大学を卒業してから、どんな仕事に就くか一時迷つていたようだが、結局は陸軍に入った。軍医というのはいわば武士の医者のようなものである。彼が陸軍に入ったのはそのためであるという三好行雄の説に私は賛同する。また鷗外自身も、自分の中に武士道の精神が存在することを『妄想』と題する作品に仄めかした。

これと関連して、蒲生芳雄は尾形仿と違う説を立てる。やや長いが、彼の説を引用してみたい。

『阿部一族』の執筆にあたって鷗外を内から導いたものは(中略)ともかく、△昔の人々の主観的眞実、あるいはその傾向を伝える『阿部茶事談』という一つの史料——といふよりはその中に書きとどめられる△昔の人々△の死生のかたち——に触発されたある種の感動、あるなつかしい風景に出会った者だけが体験するあるインティメートな感情のごときものではなかつたか。そしてその大もとにあるものは、おそらく、鷗外の精神史における、いわば原点としての故郷体験——西洋との出会い以前の△思い出△に通じる故郷体験ではなかつたか。たとえば、「小さい時二親」から、「侍の家に生まれたのだから、切腹ということが出来なくてはならないと度々論」(『妄想』)された△思い出△に通じる故郷体験。——とすれば、鷗外が、新しい史

料の中に見いだしたささやかな挿話、切腹の座に着いて莞爾と笑う武士の剛毅さや、小脇差を腹に突き立てた上で殉死を願ひ出した武士の意地強さにかかわる挿話を見捨てがたかつた云々。

鷗外はこの作品では確かに権力者に対して批判的な姿勢を見せている。例えば、権兵衛を縛り首にさせた光尚の場合、あるいは阿部の跡目の献策を計う林外記である。また功利的な面を求める殉死もあることを暴いている。だが、彼は決して武士道精神全体を否定しているわけではない。彼は「名譽」や「勇氣」を重んずる一個の武士の強い精神を肯定しているのである。

(3) 『佐橋甚五郎』

甚五郎は興津と同じように同輩を殺してしまつたが、理由が異なる。興津の場合はすでに述べたように、生命を果たすためであつた。甚五郎の場合は武芸を以て蜂谷と賭(か)ことをしたが、蜂谷が約束を守らないからである。蜂谷も確かに難しい立場に置かされた。請求された刀は蜂谷家には由緒の品であり、すんなりと甚五郎に渡せば面目がつぶれる。一方、甚五郎は自分の武芸を以て勝つたのだから当然の代償として刀を請求したのであり、別に相手の刀を妾(めかけ)りにもらおうとするわけではない。蜂谷の拒絶は、自分の武道の誇りを傷つけ、武士の誓言(ちかひごころ)に背く不信心行為と考へたので、蜂谷を討ち果たしたのである。しかも蜂谷の刀を取つた後、代わりに自分の刀を置いた。ここでは、甚五郎の自己の能力に対する強い自信とプライドが描かれている。この場合、なぜ彼の行為が正当なものと認められなかつたか

は明らかではないが、ともかく彼は興津と同様、主君に助命を受けた。だが甚五郎の場合は、甘利を討ち果さなければならぬ条件付きの助命である。甚五郎はこの命がけの義務もうまく為し遂げた。それにもかかわらず、主君家康は彼のことを信頼しない。甘利を討ち果した時の甚五郎のやり方が気に入らないと言っているが、忠利が阿部を好かぬことと類似する。しかし、甚五郎は阿部と違って、主従関係が不和であることを悟った時に、自分の誠実を死で示すのではなく、主従関係を切つて、姿を消したのである。この行為については尾形怱の説に従えば、『かのように』の中で秀麿の画家である友人が言った「突貫」の営みであり、「封建領主の絶対権力の形を変えた延長としての皇室の絶対権力と、近代的理性的自我との矛盾間にどう解決の途を見出してゆくかという課題に対する究明の営みの一つ」であると言ふ。

残念ながら、主従関係を切つてしまった甚五郎は、日本、とりわけ家康時代の社会には身を置くことは出来なくなり、「群れ」から外れた一匹狼のような運命となる。

四、結語

ここでとりあげてみた鷗外の作品を見ると、理想化される武士道だけでなく、人間臭さのある武士の自然な姿が描かれている。主君と調和的な関係が保たれる興津のような武士から始まり、主君と性格が合わないので許可のない殉死をきっかけに滅

びてゆく阿部、そして信頼関係がうまくいかないため主君の前から去る甚五郎のような武士に至つたのである。

これらを見ると、鷗外には次のような目的があつたように思う。それは、封建社会の風習を捨てたことよつて精神の抛り所をなくした近代人に向かい、未来を把握するには歴史にあつた事項を再認識する必要があることを強調する。彼の作品の舞台となつてゐる武士社会をふりかへつてみると次のように言えよう。藩は武士社会の一単位として、一種の国家である。その生存を保持するためには必ず掟が必要になる。しかし、その中に生きている武士は、不平な扱い、特にプライドを犯すような扱いを受けている場合、自我を主張するために掟を破ることもあり、自滅しても名誉を守る。このような強い意志、死を恐れぬ勇氣を持つてゐる個人が存在するからこそ国家が繁栄し且つ強くなる。鷗外はこのような考えに基づき、個人を重視する態度を取つてゐるように見える。

徳川時代が幕を閉じたと同時に武士社会も終わった。だが、その精神は明治時代を経て今日まで生き続けているように思う。日本の近代化を可能にさせたのは、この精神が日本人を力強くさせたからではなからうか。鷗外が武士社会を舞台にして数多くの歴史小説を書いたことは、彼にとつて武士道は特別な意味があろう。

発展途上国、とりわけインドネシアは日本から学べるものが多い。無論インドネシアの独自性にプラスになるようなものを選択しなければならぬが、武士道のような精神的なものを学

ぶ価値があると信じる。

註

- (1) 唐木順三、『唐木順三全集』第一卷 筑摩書房 一九八一 p. 15
- (2) 例えば、唐木順三 同上 p. 425
大谷晃一、『鷗外、屈辱に死す』人文書院 一九八三 p. 99 以下
- (3) 磯貝英夫他四人、『森鷗外』日本文学 13 学生社 一九七七 p. 199 以下
- (4) 鷗外、『鷗外選集』第十三卷(予が立場) 岩波書店 一九八〇 p. 229 以下
- (5) 尾形仇、『森鷗外の歴史小説』史料と方法 筑摩書房 一九八〇 p. 105
- (6) 日本文学研究資料刊行会、『森鷗外 I』(尾形仇、「歴史小説の史料と方法」一九八二 p. 273
- (7) 上記の(3)と同 p. 30
- (8) 浦生芳郎、『鷗外の歴史小説』その詩と真実 春秋社 一九八三 p. 100
- (9) 上記の(5)と同 p. 115

(ジョンニ・ラスマダ・H・筑波大学大学院哲学・思想研究科
在学中)